
インフィニットストラトス零式

御坂弟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニットストラトス零式

【Nコード】

N5564Y

【作者名】

御坂弟

【あらすじ】

ルルサスの軍勢から世界を守るために戦い死んでしまったエース死んだはずの彼が目を覚ましたのは・・・

設定（前書き）

注意！ この小説は途中で文章力が低下したり、読みづらくなるかも知れません

それでもいいという人だけ観てください

設定

主人公

『エース・アルラシア』

かつてオリエンズで突如現れたルルサスの軍勢から世界を守り

十一人の仲間と共に死亡、しかし目が覚めると

そこには自分ひとりだけで、見知らぬ世界に居た

使用IS

『零式』

第零世代

見た目はバハムート零式に酷似している

今までのISとは全然違い

武装の原理も分からないため第零世代とされている

武装

『フレア』

ライフル型になっている、エネルギーをためることで

メガフレア ギガフレア テラフレア、のように強化されていく

『クリスタル』

零式の内部に搭載されていてISのコアの役目と

朱雀クリスタルの力（魔法）を使えるようになっていく

『グランドスラッシュ』

零式の手についている鋭い爪

素材がオリハルコンというこの世界には存在しない金属で出来ている

ものすごい切れ味と絶対に破壊されない硬度を持つ

単一能力

『朱雀』

体が赤く発光、しばらくの間性能が三倍から十倍され
グランドスラッシュには魔法の力をまとわせ
バリア無効化攻撃を使うことが出来る

しかしまだよく分かっていないことが多々ある

設定（後書き）

更新が遅くなるかも知れませんが宜しくお願いします。

見知らぬ世界で（前書き）

試験期間近くに新作を書いた馬鹿ですがお願いします

見知らぬ世界で

僕は目が覚めると見知らぬ部屋に居た

？「あれ？ここは？皆？マザー？」

僕たちは、世界に突如現れたルルスから世界を守るために戦った
そして・・・死んだ

皆で力を合わせて、クリスタルになってしまった

マキナとレムの力を借りて、

シドを・・・審判官を倒して・・・

死ぬのが怖くなくても、皆で励ましあい、

・・・死んだ

僕たちは確かに死んだんだ。

それなのになぜこんな場所に居るのだろうか？

もしかして此処が天国？

いや、あれだけの人を殺した僕が天国にいけるわけが無い
じゃあ、ここは地獄かな？

それにしては、やけに静かだな？

？「目が覚めたか」

「うわぁ!?!」

？「そこまで驚く事もないだろう。」

私は織斑千冬、ここ、IS学園の教師をしている」

この人は織斑千冬と言う名前らしい
それにしても変わった名前だな

エ「僕はエース・アルラシアと言います。すみませんが此処はどこですか？」

千「だから、IS学園だと言っている」

エ「IS学園？魔道院じゃないんですか？」

魔道院とは、アギトを目指す人々が集まる場所のことだ

千「何だ、魔道院とは？」

魔道院を知らない?・・・おかしい、朱雀に住む人なら
誰でも、それこそ子供でも知っていることだ

エ「すいませんが、この国の名前を教えて貰ってもいいですか？」

千「?可笑しなことを聞くな?日本を知らないのか?」

エ「日本・・・ですか?」

おかしい・・・オリエンズ四大国以外の国も幾らか本で見たが日本などと言う国は無かった

エ「朱雀と言う国を聞いたことがありますか？」

千「いや、無いな。おまえさつきからおかしいぞ？」

おかし過ぎる、しかし一つだけ考えられることがあるが
いや、おそらくはそれだろう

エ「おそらく信じられないでしょうが、
僕はこの世界の人間じゃないです」

そして僕は話した・・・オリエンズのこと、クリスタルのこと、
朱雀のこと、0組のこと、そしてルルサスのことを・・・

千「確かに、にわかには信じられないな、ん？お前、それは？」

千冬さんは0組の目印である、朱のマントを指差す

エ「これがどうかしましたか？」

千「それはISの待機状態じゃないか？」

エ「ISってなんですか？」

千「そうか、お前は知らないのだったな」

そして俺は聞いた、ISのこと、篠ノ之束のことを

僕は篠ノ之束とシドが似ていると思った
方法は違うにしろ、どちらとも世界を自分で変えた、
自分のカリスマ性で、自分の頭脳で
世界を変えた

しかしそれには、他に悲しむ人がいること
シドの場合、白虎以外の国の人々
篠ノ之束の場合、世界中の男性
多くの人が苦しみ、悲しんでいるのは確かだ
原因が何かあるのかも知れないが

千「おい！どうした！？」

エ「うわぁ！？なんですか？」

千「いくら話しかけても反応しなかったのだ」

それは気付かなかった

エ「ああ、すいません。考え事をしてました」

千「まあ、何かは聞かないが、

お前はISを動かせる男性としてIS学園に入学してもらった」

エ「ええ！？何ですか！？」

千「お前がISを動かせると世間に知れたら
全世界から狙われることになるぞ。

しかしIS学園は他の国とは隔離されているから安全だ」

エ「はあ、分かりましたよ」

千「お前には転入と言う形で入学してもらおう」

エ「はい、分かりました」

はあ、ISの学校だから女子しか居ないんだよな
一人だけ男が居るらしいが

まあ、ジャックが物事は前向きに考えればいって言ってたし
何とかなるだろう

見知らぬ世界で（後書き）

お読みいただきありがとうございます

更新は出来るだけ早くします

見慣れない風景（前書き）

今回最後にアンケートがあります、ぜひ答えてください

見慣れない風景

僕がこの世界に来てから一週間が経った、

そしてこの世界について分かったことがある

前の世界で使ってたカードは使えた、後、魔法も一様使えた

学校は千冬さんに今度二人の転校生が来るからその時に一緒に入学しると言われた

教師
・・・理由を聞いたら面倒だからと言われたけど、それでいいのか

まあ、それまでの間は千冬さん直々にISSの操縦について教えられた、

中々筋が良いとは言われたけど、実際の所どうなんだろう？



それから数日後にとうとう転校の日が来た

一緒に転校することになった人は

僕を含めて三人目の男性のIS操縦者のシャルル・デュノア
少し？女の子みたいな仕草があったけど・・・まさかね

もうひとりがラウラ・ボーデヴィツヒ、

眼帯をしている医療用じゃなくて軍の人がしてるマジな黒眼帯
それに凄く話しかけづらい

千「では入って来い」

千冬さんに呼ばれて僕らは教室に入る

シャルル・デュノアです。フランスから来ました。

この国では不慣れなことも多いかと思いますが、宜しく願いしま
す」

『ぎゅ……』

ん？何だろっ

『きゃあああああ……っ！……！』

なっ！？声でこんなに揺れるのか？
まるで地震だな

千「あー、騒ぐな。静かにしろ」

凄い鬱陶しそつにばやく千冬さん

エ「エース・アルラシアです、こんな僕ですがぜひ気軽に声をかけてください」

『きゃあああああー！ー！ー！』

もう耳がじんじんする

山「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから」

後残ってるのはボーデヴィツヒさんか

ラ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

当の本人は未だに口を開かず、千冬さんをじっと観ていた

千「・・・・・・・・挨拶しろ、ラウラ」

ラ「・・・・・・・・はい、教官」

教官？千冬さん昔は軍に居たのか？

ラ「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

・・・沈黙

山「えーと、以上ですか？」

恐る恐るという感じで聞く山田先生

ラ「以上だ」

そしてきっぱりと言うラウラ、先生泣き目だぞ

ラ「！貴様が・・・」

バシッ！

ラ「邪魔をするな！」

エ「いや、普通目の前で殴ろうとしたら止めるだろ」

ラウラは、もう一人の男子生徒、織斑一夏を殴ろうとしたため
その手を掴み、止めさせる

千「何をしている、早く座れ」

そこに千冬さんの一言

ラ「・・・ちッ、私は認めない、貴様の様な奴があの方の弟である
など」

千冬さんの言うことは聞くようで、すたすたと僕らの前から
立ち去って行った、そして席に着くと腕を組み、目を閉じ、動かな

くなる

コイツら昔に何かあったのか？

千「あー・・・ゴホンゴホン！ではHRを終わる。

各人は直に着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同で模擬戦闘を行う。解散！」

そんな思考を遮る様に千冬さんの声が聞こえた、あれ？俺達はどうすれば？

千「おい、織斑。デュノアとエースの面倒を見てやれ。同じ男子だろ？」

一「とりあえず、さっさと移動しよう。女子が着替え始めるから」

そういうと一夏は僕とシャルルの手を掴み、そのまま教室をでた

一「とりあえず男子は空いてるアリーナで着替えな。これから実習のたび

だから、早めに慣れてくれ」

エ「ああ」

シャ「う、うん」

まただ、コイツは拳動不審すぎる

一「そういえばさっきはありがとな」

突然一夏から礼を言われた

エ「ああ、気にするな。」

一「うお！まじで時間やべえ、走るぞ」

見慣れない風景だけど、こつこつのも良いかもしれないな

見慣れない風景（後書き）

今回は、この作品のヒロインについてアンケートを取りたいと思います

- 1、ヒロインは何人が良いか
- 2、誰が良いのか

などを教えてください。

期限は、十一月二十五日までに行いたいと思います

初めての模擬戦（前書き）

アンケートの結果+この先の展開を考えて、ヒロインは
楯無

簪

シャル

ラウラに決定です、まだ変わる可能性はありますが・・・

初めての模擬戦

僕は今、絶賛逃亡中である
なぜなら・・・

『ああッ！転校生発見！』

『しかも織斑君と一緒に！』

そう、アリーナに移動中に女子に追われているのだ
あれにのまれてはいけないと本能が言っている

『いたっ！こっちよ！』

『者ども出会え出会えい！』

こ、これが日本の侍って物なのか？

『織斑君の黒髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね』

『しかも二人とも瞳はエメラルド！』

『きゃああっ！見て見て！二人とも織斑君と手つないでる！』

『日本に生まれて良かった！ありがとうお母さん！』

今年の母の日は河原の花以外のをあげるね！』

いやいや、駄目だと思うよ？親孝行はちゃんとしないと

まずい、早く逃げよう

こんな時こそ、カードを使おう

「二人とも、手しっかり握っててね」

「「えっ?」「」

「テレポカード!」

遠くにカードを飛ばし、その場所に転移する
すると・・・

「えっ!?!」

目の前には水色の髪の少女・・・

「・・・今の・・・な・・・に・・・?」

「あー、え、えっと」

「やばい、どうしよう」

「言い訳を考えるんだ、僕」

「はっ!これだ」

「僕のISの能力だよ」

「さあ、どうだ?」

「・・・そうなん・・・だ・・・」

「良かった、何とか誤魔化せた」

「おい、マジでやばいぞ!」

「あ、わかった。早く行こう。じゃあ、またな」

「うん、うん」

.....

?サイド

私の前に突然現れたあの人、大好きなヒーローみたいに突然現れたあの人

・・・かつこよかったな。

あれ?・・・おかしいな?

彼を思い浮かべると顔が熱くなる・・・

一目ぼれって言うのかな?

?サイドend

.....

「よし、到着!」

何とか無事に到着、

「うわ、時間ヤバイな!早く着替えようぜ」

「うん、分かった」

あのISスーツ、着づらいんだよな

取り合えず、服を脱ぐ

「わあっ!?!」

「ん?どうした?」

「う、ううん。なんでもない。でも、その、あっち向いてて」

「?まあ、いいけど」

その後は何事もなく・・・いや、シャルルが着替えをじろじろ見たので

止めたりとか、家庭事情とかを一夏と話してた

「遅い!」

ぶじグラウンドに到着・・・とは行かず、
鬼が腕を組んでいる

バシーン

「お前らは次は無いぞ」

僕らは叩かれずにすんだ

あの出席簿って何で出来てるんだろ？

そして列に整列、列は背の順なので一夏が一番後ろに行き、僕とシャルルは真ん中辺りに座る

なんかセシリアさん達に責められてる

あ、織斑先生に叩かれた

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

今日の授業は一組と二組の合同なので妙に声に気合が入ってる

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子も居ることだしな・・・鳳！オルコット！」

「なぜわたくしまで!?!」

反論するセシリアさん

「専用機持ちはすぐにはじめられるからだ。いいから前に出ろ」

「だからってどうしてわたくしが・・・」

「一夏のせいなのになんでアタシが・・・」

なにかしたのか、一夏は？

「お前らすこしはやる気を出せ・・・」

千冬さんが二人に耳打ちをする
なに言ってるんだらう？たぶん一夏からみだと思っけど

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！専用機持ちの！」

うん、きつと一夏の事だ、間違いない

二人は一夏に惚れてるみたいだし

「それで、相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でもかまいませんが」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

「そうか、それではエース、こっちに来い」

「え、僕？」

「ああ、そうだ」

「ちょ、ちょっと待ってください、先生！」

「そうです、何でアタシがそんなIS初心者と」

「安心しろ、確かにコイツはISを動かして一週間程度だが、私が直々にマンツーマンで操作を教えたからな、お前らの相手には十分すぎる」

「で、でも」

「大丈夫だ、私が教えた通りにすれば勝てる」

「わ、分かりました」

「・・・舐めてますわね」

「・・・舐めてるわね」

「それでは始めよう、エース、早く展開しろ」

「はい！」

意識を集中させ、頭の中にそれを思い浮かべる

・・・覇者たる者を・・・

「来い！零式！」

僕が呼びかけるとマントが黒と金の粒子状になり、体を包み込む
そして体には、装甲が展開される、体全体に金と黒の少し生物のよ
うな

装甲が、そして背中には巨大な翼が展開され、そこからは金色の粒
子が吹き出していた

顔には竜を模したバイザー

手には巨大な爪

その姿はまさしく覇者

「さあ、始めようか」

「それでは・・・はじめ！」

始めの合図と共に鈴がエースに突っ込んで行き、逆にセシリアは距離を取る

鈴は柄の両方に刀身の付いた青龍刀を零式の爪、グランドスラッシュで防ぐ

「甘い！」

甲龍の肩アーマーがスライドし、球体が光った瞬間、見えない何かに吹っ飛ばされる

「なんだ？あれは？」

「今のはまだジャブよ」

何だあれは、見えない攻撃・・・空気が空気を圧縮して打ち出しているのか
それなら・・・

鈴はその後に衝撃砲を撃ってくるが、その攻撃は立て続けに避けられる

「なんで当たらないのよ！」

「その攻撃、一直線にしか飛ばせないだろ、どこに飛んでくるかは勘だけだ」

鈴の衝撃砲を避けていると、そこに青いビーム、セシリアのブルーティアーズの

ビットによる射撃だ

「わたくしを忘れて頂いては困りますわ」

衝撃砲とビットの射撃の中を全速力で抜け、セシリアに近ずき爪で一撃入れる

すぐにビットが戻ってくるのでこちらに近づいてきていた鈴に向かい飛ぶ

そこにセシリアのライフルによる射撃が来たため鈴と位置を入れ替わり

鈴にビームを当てる、

「きゃあ！ちゃんと狙いなさいよ！バカ！」

「鈴さんが射線上に入ってきたんじゃないやありませんか」

どうやらこの二人は仲が悪いようだ

「ちょっと、何やってんの？」

「」「」「うるさい！」

え？僕何かした？

「あなたのせいですわ」

「アンタのせいよ」

えー！？何でこんなに怒ってるの？

二人はもうチームワークなんて無視で自由に動いていた
だから

「痛！なにやってんの」

「邪魔ですわ」

みたいなのが多数あった

鈴がセシリアの射撃で怯んでいる間に爪で一閃、シールドエネルギーが

切れた鈴は落ちていく

「きゃあ！」

そして残ったセシリアも瞬時加速で近づき、落とす

初めての模擬戦は僕の勝ちで幕を降ろした
でもこの二人、仲悪すぎるだろ

「どうだ、これでも初心者と言うか？」

「でも今回はパートナーが」

「そうです、パートナーが悪かったんです」

「言い訳をするな、一流の操縦者だったらどんなパートナーにも合
わせるものだ

それに今回の戦い、こいつは射撃武器を使っていない」

「くっ!」

「まあまあ、そのくらいで」

「そうだな、ではこれより実習を行う、各専用機持ちの場所に並べ」

その後は、一夏が女子をお姫様抱っこしたり、それを見た僕の班の人も

やろつとして千冬さんに怒られたり、ラウラさんの所の空気が重かったり

いろいろあった

初めての模擬戦（後書き）

はい、おかしいですね。

なんでこんなにエースが強いのかと思うでしょうが、そこはスルーでお願いしたいです

同室者と武勇伝（前書き）

やっと書けた！

なかなか今回の内容が出来なかつたんですよ

同室者と武勇伝

「じゃあ、改めてよろしくな」

「ああ、頼む」

「うん。よろしく、一夏」

夜、夕食を終えて僕と一夏とシャルルは部屋に戻ってきた。

朝と同じでいろんな女子に質問攻めにあっただけど、一夏が切り上げてくれたので助かった

そして部屋はもともとが広いので、ベッドを一つ足して三人部屋になった

それで今は一夏のいれた日本茶を飲んでいる

「紅茶とはずいぶん違っんだね。不思議な感じ。でもおいしいよ」

「うん、結構いけるな」

色は結構変わってるけどな

「気に入ってくれたようで何よりだ。今度機会があったら抹茶でも飲みに行こうぜ」

「抹茶ってあの畳の上で飲むやつだよな？特別な技能があるって聞いたことがあるけど、一夏はいれるの？」

「へえ、そんなものもあるのか」

「ああ、日本にはお茶の種類が結構あるんだ。それと、シャルル、抹茶はたてるって言うんだ。まあ、俺も略式のしか飲んだこと無いけど。」

今は駅前に抹茶カフェっていうのがあるんだよ。コーヒー感覚で飲める奴」

「ふうん。そうなんだ。じゃあ今度誘ってよ。一度飲んでみたかったんだ」

「おう。ついでに色々案内するぜ？折角だから今週の日曜にでも出かけるか」

「本当？嬉しいなあ。ありがとう、エースも行くよね？」

「ん？ああ、大丈夫だけど」

シャルルの笑みを見てると本当に男なのかと思ってしまっ
普段の行動も少し女っぽいからだろうか

「えーと、シャワーなんだけど順番とかどうする？その日その日でも良いけど」

一夏はシャルルの笑みを見て照れたのだろうか、突然話題を振って来たけど

ばればれだぞ一夏、シャルルも気付いたように笑ってるし

「あ、ボクが後でいいよ。二人が先に使って」

「僕も後で大丈夫だ」

「う？うん、そう言われると逆に使いづらいというか……。
二人も実習終わってすぐにシャワーを浴びたい日だってあるだろ？」

「ううん、平気だよ。ボクってあんまり汗をかかない方だから、
すぐにシャワー浴びなくてもそんなに気にならないし」

「僕もそんなに気にしないから大丈夫だ」

オリエンスでは任務とかで何日もシャワーなんて浴びない日もあつたせいか、もう慣れた

「そっか。じゃあ、ありがたく使わせてもらう。でもあれだぞ、
遠慮とかしなくていいからな。なにせ男同士なんだし」

「うん。ありがとう」

「ああ、分かった」

またシャルルがにこつと笑顔を見せる。

なんかシャルルってお礼の言い方がすごい自然なんだな
たぶんそれでドキツとしちゃうんだろう

「そういえば一夏は放課後にISの特訓してるんだよね？」

「ああ、俺は皆よりも遅れてるから、地道に訓練時間を重ねるしかないからな。」

そういえば今月には学年別トーナメントって言うのがあった気がするな

「僕も参加していいか？多少なら手助けになると思っけど」

「あ、ボクも加わりたいな。何かお礼もしたいし」

「おお、それはありがたい話だ。ぜひ頼む」

「ああ、任せろ」

「ボクもがんばるよ」

「そういえば何でエースはあんなに操縦が上手いんだ？

まだESを起動させてからそんなに時間経ってないだろう？」

「ああ、確か起動させたのが一週間前くらいだったかな」

「凄いよね、たった一週間で代表候補生二人相手に勝っちゃうなんて」

「いったいどんな特訓をしたんだ？」

「実はな、一週間前からここには来てたから、夜のアリーナを使っ
てない

時間帯に千冬さんにマンツーマンで操縦を教えれてな、

地獄ってあれのことを言うんだろっな、模擬戦しても本気で来るし」

「あはは」

「まあ、千冬姉ならありえるな」

「しかも失敗すると出席簿で叩かれるんだが、

あの出席簿くらってシールドエネルギーが百位減ったんだよね」

「もうそれ人間じゃないよね!？」

「いや、あの人に常識は通用しない」

生身の人間が出席簿でISを倒すってすごいシュールな光景になり
そうだ

「ああ、千冬姉はターミナーなんじゃないかって思っただ」

あの人ならルシにすら勝てそうだしな

「あはは（苦笑）」

もうシャルルが付いて来れてないな、初めての奴には刺激が強かつ
たか

「しかも昔剣術の修行で山籠りした時に熊を倒してたし」

「あの人なら余裕だ、多分片手だけで倒せるだろうな」

「・・・それが小学生のときだ」

「おい!？それはさすがに予想外だったぞ!？」

「中学のときはヤクザに絡まれて、木刀一本で全滅させたんだ、相
手は銃とか持ってたのに」

「・・・ほんとに織斑先生ってサイボーグなのかな？」

「なんかあの人なら何でも出来る気がするな、一夏」

「ああ、出来ないのは彼氏ぐらいだ」

「「ああ〜」」

そこだけは納得できる僕とシャルルだった

同室者と武勇伝（後書き）

アドバイスなど気軽にお願ひします
むしろ書いてください、お願ひします（笑

シャルルの講習と整備室（前書き）

はあ、今回のテストの結果が返ってきましたが、終わってました
三百点台って怒られる所か、クリスマスにPS3が買ってもらえな
いかも

シャルルの講習と整備室

「ええと、一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「そ、そうなのか？一応わかっているつもりだったんだが・・・」

僕達が転校してきてから5日が経って、今日は土曜日だ。

土曜日は午前が座学の授業で、午後は完全自由時間で、アリーナが開放されているので、

ほとんどの生徒が実習に使う。それで僕たちは一夏の訓練のアドバイス等をしている

実は僕の零式は射撃武器が未完成なので、模擬戦はしていない。ちなみに、一夏の白式と違って零式にはちゃんと拡張領域がある

「たぶん知識として知ってるだけだろう。さっきのシャルルとの模擬戦も

ほとんど間合いを詰められなかっただろ？」

「うっ・・・、確かに瞬時加速も読まれてたしな・・・」

「一夏のISは近接オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ」

「そうそう、一夏の瞬時加速は直線的だから軌道予想だけで当てられるんだよ。」

「直線的か・・・うーん」

「だからって瞬時加速中はあまり無理に軌道を変えない方がいいぞ。空気抵抗とかで骨がボツキリ行くかもしれないからな」

前から筭やセシリアに教えてもらってたら気付くはずなんだがな、まあ無理も無いだろう」

『ごう、ずばーっとやってから、がきんっ！どかんっ！という感じだ』

『なんとなくわかるでしょ？感覚よ感覚。・・・はあ？なんでわからないのよバカ』

『防御の時は右半身を斜め上前方へ五度傾けて、回避の時は後方へ二十度反転ですわ』

・・・これで分かる奴はかなり凄いと思うんだがそれに比べ、シャルルの解説は分かりやすい。

・・・ちなみに千冬さんは体に叩き込むタイプだ

ていつか俺もそろそろ射撃武器を作らないとな

今月には学年別トーナメントがあるからそれまでには完成させたいISやその武器は一樣普通の整備課の人以上には作るのが上手いらしい

「ちょっとさ、僕まだやる事が有るからあがるぞ？」

「ああ、サンキューな。また頼むわ」

「じゃあ、また後でね」

「ああ、じゃあな」

そして僕は整備室に向かう

・・・・・・・・・・・・・・・・

整備室

「さてと、始めますか」

今、僕の目の前にあるのが零式専用の射撃装備『フレア』だ。
どうやら零式の動力は他のISよりも高性能で莫大なエネルギーを
作り出せるらしい、
そして、そのエネルギーを打ち出すことが出来るのが『フレア』だ。
ただ、エネルギーの誘導が上手くいかなく、前に作ったものは暴発
してしまった

「うーん、やっぱり上手くいかないな・・・ん？」

良くみると整備室の奥がうっすらと光っている
興味の沸いた僕は奥に行ってみることにした
そこには・・・

カタカタカタカタ

高速でキーボードを打っている女の子、
特徴は水色の髪にメガネってところか

「・・・なに？」

「いや、ちょっと気になったからさ」

「・・・え!？」

おそらく足音などで判断したからだろう、きたのが男じゃなくて女だと思ったようだ
声を聞いたなら驚いてしまった

「そんなに驚かれるなんて傷つくな」

「あ・・・その・・・ごめん」

本当に涙目で謝ってくる少女

「あ、おい、冗談だから。安心しろよ」

「・・・うん」

危ない危ない、女の子を泣かせるのは好かない

「そういえば、前にあったよな？リボンの色が他の人と同じだから一年だろ？」

IS学年は一年が水色、二年が黄色、三年が赤だ

「・・・うん・・・一年四組」

「名前は？僕はエースって言うんだけど」

「・・・更織簪・・・」

「じゃあ簪で良いか？」

「・・・うん。・・・でも、あなたも、やること有るんじゃないの？」

「あ、そうだった。あのさ、大量のエネルギーを武器に送るのにはどうすれば良いと思う？中々出来なくってさ」

「・・・ちよつと見せて」

そういつて僕の出したスクリーンをみる簪

「・・・すごい、エネルギーの量・・・」

「ああ、なんか特殊なコアみたいでエネルギーの量が凄いんだ」

「・・・こんなの打つたら、アリーナが吹っ飛ぶ。」

「ああ、じゃあエネルギーの上限を決めよう」

「・・・エネルギーの伝達は、ISのコアバイパスを利用すれば大丈夫だと思う」

「武器にISのコアバイパスか、思いつかなかったな」

「・・・エネルギーはこれくらいなら大丈夫だと思う」

凄いな、簪のおかげでだいぶ完成した

「サンキュー、そういえば簪は何を作ってるんだ？」

「・・・私は、専用機を・・・作ってる」

「そういえば日本の代表候補生だっけな。今日のお礼に僕も手伝うぞ？」

「・・・いい、一人でやらないと・・・意味ない」

「何でだ？」

「・・・それは、言えない」

「大丈夫だ、俺は言いふらしたりしないし、人に話すと幾らか楽になるぞ？」

「・・・分かった」

そして僕は簪から話を聞いた。

簪の姉の楯無はロシアの代表生で、自身のISを作るほどの才能が有ることを、

そして、簪がその姉につりあうようになるために一人で専用機を作っていること、

どうやら簪はいくつか誤解をしているようだな

「簪、お前はさ、その姉のことが好きか？」

「・・・うん」

「そうか、分かった。そろそろ帰らないと駄目だ。帰るっぜ?」

「う、うん」

「ここは少し手伝ってやるか、このままじゃずっと仲良く出来ないだろうし、」

簪の話を書く限りだと悪い人じゃないみたいだし。

まったく、やることが多くて困るな

.....

簪サイド

今日もいつもどおりに打鉄式式を作っていた。

そんな中現れたのは、前にあったもう一人の男性のIS操縦者
彼の名前はエースって言うみたい

何で私は彼にお姉ちゃんの話をはなしたんだろう?

たぶん私の中に彼に助けて欲しいって気持ちがあるんだと思う
彼は私とお姉ちゃんの話も聞いても私達を比較しなかった、

私を私としてみてくれる。

あの人は他の人と何が違うんだろう?

シャルルの講習と整備室（後書き）

転生は明日、明後日のどちらかには出すと思います

シャルル・デュノア（前書き）

うう、肩こりが酷い。

何時間もパソコンの前に座っていると肩が酷くなりますよね・・・

シャルル・デュノア

整備室での一件の後、今僕は部屋に戻るところだ

(うーん、どうすればいいんだろう?)

「あ、エース、いい所に」

僕が簪たちの仲直りの方法を考えていると、一夏が話かけてきた

「うん? どうしたんだ?」

「シャルルが先に戻ってるからもし、シャワー浴びてたらクローゼットの

シャンプーを渡しといてくれないか? 場所教え忘れちまってさ」

「なにか用事でもあるのか?」

「ああ、ちょっと白式について書類を書かないと駄目なんだ」

「そうか、わかった」

.....

自室

(あれ? シャルルが居ないな、シャワーの音が聞こえるしシャワー室か?)

僕は一夏に言われたとおり、クローゼットからシャンプーをだし、シャワー室に向かう

『ガチャ』

あれ？なんで音が二つ？ああ、きっとシャルルがシャンプーを取りに来たんだろう

「シャルル、これ替えの……」

「え、え、エース？」

「……アレ？」

シャワーから出てきたのは『女子』だった
金髪の髪には若干ウエーブがかかっている、
そしてその体も女子のものだった

僕も男なので、視線を逸らさないと駄目だと分かっている、
中々目を逸らせない

「えつとだな、その……」

(これ絶対シャルルだよな、前々からもしかしてと思ってたけど)

「シャ、シャンプー置いとくぞ……」

「う、うん……」

精神的にきつくなった僕は急いでそこを離れた

・・・・・・・・・・・・・・・・

そして数分後・・・

「あ、あがったよ・・・」

どうやらシャルルと思われる人物があがったようだ

「あ、ああ」

聞こえてくる声はやはりシャルルのものだ・・・

そしてその姿も女子のそれだった

おそらくバレたからだろう、胸を押さえていないらしく、ジャージのふくらみが

はつきりと確認できる

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

かれこれ一時間くらいはこうしてるだろうか。

凄く気まずく、正面のベッドに座った少女、というかシャルルと僕は視線をさまよわせたまま、無言の時を過ごしていた。

「あ、あのさ、お茶飲むか？」

「う、うん。もらおうかな・・・」

僕は電気ケトルで、お茶を沸かしそれを急須に注ぐ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

お茶が出来るまでの時間は再び沈黙・・・

「たぶんもう大丈夫だろ。はい」

「あ、ありがと・・・きゃっ！」

湯のみを渡すときに指が触れて、シャルルが慌てて手を引っ込める。それにより、湯のみが落ちそうになり、持ち直した反動でお茶が手にかかる

「あっつ！水っ！水っ！」

急いで水道まで行き、水を出し、急いで冷やす。急いで冷やしたので、何とか重症にはならなかった

「ご、ごめん！大丈夫!？」

「あ、ああ気にするな。すぐ冷やしたから大丈夫だろ」

「ちょ、ちょっと見せて。・・・ああ、赤くなってる。ゴメンね」

パニックだったシャルルは僕の側に来ると強引に手を引っ張って
お湯のかかった箇所を痛々しげな表情で見つめる

「すぐに氷もらってくるね！」

「待った！その格好で外に出るな！」

いまのシャルルはまんま女の子の格好だ。
外に出たらどうなるかは目に見えてる

「でも……」

「それより、その……なんだ。
さっきから胸が当たってるんだが……」

「!?!?!」

言われてから素早く胸を隠すように自分の体を抱く

「……」

そして弱々しくではあるが、抗議のまなざしを送ってくる

「心配してるのに……エースのえっち……」

「はあっ!?!」

僕か!?!僕が悪いのか!?!理不尽だろ!?!

「……まあ、これくらい冷やせば大丈夫だろ。じゃあ、改めて」

「う、うん」

今度はしっかりと湯のみを受け取ったシャルルが日本茶を一口のみ、
僕も一口のみ、喉を潤す

「なんで男のフリなんかしてたんだ？」

「それは、その・・・実家の方からそうしろって言われて・・・」

「実家って言うと、デュノア社の？」

「そう。ぼくの父がその社長。その人から直接の命令なんだよ」

なんだ、この違和感。妙にシャルルの表情が暗いな。

「命令って・・・親だろ？何でそんな」

「エース、ぼくはね、愛人の子なんだよ」

……。絶句した。僕だってその言葉の意味を知らないほど世間に疎くもなければ純情でもない

「引き取られたのが二年前。お母さんが亡くなった時にね、父の部下がやってきたんだ。それでいろいろ検査してIS適正が高いことが分かって、デュノア社のテストパイロットをすることになったんだ」

シャルルはきつと言いたくは無いかんばって言うてくれた

「父に会ったのは二回くらいかな、普段は別荘で過ごして居て、本邸に呼ばれてね、

あの時はひどかったなあ。本妻の人に殴られたよ。『泥棒猫の娘が』ってね」

「もういいよ」

「えっ？」

僕はシャルルの言葉をとめる

「もういいよ。無理に話さなくても。大丈夫、僕たちは君の事を嫌いになつたりはしないし
ずっと君に味方で有り続けるから」

僕はやさしくシャルルを抱きしめる

「それに昔マザーが言ってたんだ、『人は生まれる時代も、場所も
選べないけどどう生きるかは選べる』って」

「駄目だよエース、ぼくには選択肢が無いんだよ。本国に強制帰国
させられて

牢獄生活だつたらいい方だよ」

「だったら、僕が選択肢をあげるから。選ぶんだ、君がどうしたい
のかを」

「ぼくは・・・一緒にいたいよ」

「だったらそういえばいいんだ、安心して、デュノア社は僕が何と
かするから」

「どうするの？」

「それは秘密かな？ただ、その時には君についてきてもらうよ」

この作戦なら、きつといける
そう考えながらシャルルを見ると目があった

「ん？どうしたの？」

「あ、いや・・・」

シャルルが顔を覗き込んでくる

「と、とりあえず離れよう」

「？」

そうするとやはり・・・

「その・・・胸が・・・」

指摘されてシャルルの顔が赤く染まる

「え、エース、胸ばかり気にしてるけど・・・みたいの？」

「な、なに？」

「・・・」

「・・・」

何を言い出すんだ、この子は。

コンコン。

「「!?!?」」

「エース、いるか？一緒に飯食いに行こうぜ」

いきなりのノックに驚き、身をすくませる

「入るぞ?」

「ど、どつしよつ」

「ベッドに隠れる」

ぼそぼそ小声で話す

ガチャ

「い、一夏?どうした?」

「ああ、一緒に飯食いに行こうと思って。てかなにしてんだ?」

「ちょっとシャルルが風邪気味だな」

「そうなのか、分かった」

「じゃあ、行こう。シャルル、帰りに飯賣ってくるから」

「うん、しゅっくり」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ただいま・・・」

「あ、お帰り。あれ？一夏は？」

「ああ、セシリアと箒に連れ去られた」

「そ、そうなんだ」

苦笑いをするシャルル、分かるよ、その気持ち

「それより、飯貰ってきたぞ」

「うん、ありがとう。いただくよ」

にっこりとわらい、トレイを受け取るシャルル。

しかしそれを見た瞬間シャルルの表情が固まった

「？どうした？」

「え、えーと・・・」

「冷めるぞ？あつ！もしかして魚駄目だったか？」

持ってきたのは焼き魚定食、もしかして苦手だったかも・・・

どこかぎこちなく笑みを浮かべるシャルル、その原因は直にわかった

「あつ・・・」

ぼろっ

「あっ、あっ……」

ぼろっぼろっ

魚の身をほぐすまではいいのだが、上手くつかめないらしい。そういえば普段シャルルって箸使ってないな……僕は普通に使えたが

「箸、苦手なのか？」

「う、うん。練習してるんだけどね」

「ごめん、スプーン貰ってくる」

「ええ！？い、いいよ、そんな。これで食べるから」

「無理しないで、もっと他人に甘えていいんだよ」

「じゃ、じゃあ、あの……」

「じゃあ、スプーンを……」

「え、えっとね。その……エースが食べさせて」

涙目の上目遣い、一瞬見惚れてしまった

「あ、甘えてもいいって言ったから」

「・・・そうだな、分かった」

あの反則級の上目遣いを使われて断れる人なんて存在するのか？

「じゃあ、あーん」

「あ、あーん」

やばい、結構恥ずかしい

「お、おいしいか？」

「う、うん」

「そ、そうか」

「じゃ、じゃあ、次は、その、ご飯がいいな」

このやり取りが一時間近く続き、食べ終わる頃にまた一夏がかえってきて

焦ったのは別の話・・・

そして布団に入るといろいろなことが起こったからか、直眠りについた

シャルル・デュノア（後書き）

次話から次回予告でも入れまじょうかね。
あとがきで書くことがないや

姉妹（前書き）

今回、楯無が登場しますが多少、キャラが変わります・・・

姉妹

「そ、それは本当ですよ!？」

「う、ウソついてないでしょうね!？」

月曜の朝、教室に向かっていた僕は廊下にまで聞こえる声に目をしばたたかせた。

「なんだ？」

「なんだろうな？」

「さあ?」

隣にいるのはルームメイトのシャルル（男装バージョン）と一夏だ

「本当だつてば!この噂、学園中で持ちきりなのよ?月末の学年別トーナメントで優勝したら

織斑さんとエースさんとデュノアさんの誰かと交際でき……」

「僕たちがどうしたの?」

「「「きゃああつ!？」」」

あ、あれ!？僕普通に話しかけたよね!？

「で、なんの話だったんだ?俺たちの名前が出てたみただけど」

「う、うん？そうだったけ？」

「さ、さあ、どうだったかしら？」

鈴とセシリアは誤魔化そうとしてるけど、演技ヘタクソだな
なんか聞いちゃ駄目なことだったのか？

「じゃ、じゃああたし自分のクラスに戻るから！」

「そ、そうですね！わたくしも席に着きませんと」

よそよそしい感じで場を離れる二人。

その流れで残りの人達も戻っていった

「なんだったんだ？」

「「さあ？」」

.....

その日の昼休み、僕は簪のお姉さんに遭うために生徒会室に来てい
た、ゲストを連れて

「失礼します」

僕はゲストを廊下に待機させ、生徒会室に入る

「どうぞー」

部屋の中に居たのは簪と同じ水色の髪をした人だった

おそらくこの人が簪のお姉さんと見て間違いないだろう

「更織楯無さんでいいですよね？」

「ええ、それで何か用かしら？」

さすがだな、まったく隙が見当たらない

「ええ、簪さんの事で話を」

「!?!?!?..そう」

楯無さんは一瞬驚いたような顔をし、そして直に暗い表情になった

「楯無さん、あなたは簪のことが好きですか？」

「それは当たり前よ、たった一人の姉妹だもの。嫌いなのはないわ」

はあ、この姉妹はどれだけ不器用なんだ？

「じゃあ、仲直りしたいですよね？」

「それはそうだけど、でも簪ちゃんは私の事が嫌いだから」

「そうじゃなかったら、どうします？」

「そうじゃなかったら仲直りしてるわよ。でも現実がちがうでしょ」

「?」

「いえ、現実もそうなんですよ」

「どうしてそんな事が言えるの！なににも知らないくせに！」

あ、あれ？怒らせちゃった？

「簪はあなたのことが大好きだ、賭けてもいい」

「・・・そんな事言われたって！」

「じゃあ、証拠をお見せしますよ」

「？」

僕は指をパチンと鳴らす、すると廊下で待たせていた簪が入ってきた

「簪ちゃん!？」

楯無さんは突然のことに驚きを隠せないで居る

「さあ、簪、伝えるんだ自分の気持ちを」

「・・・うん」

簪は話始めた、自分の気持ちを・・・

「・・・私はお姉ちゃんみたいに天才じゃないから、一緒に居るとお姉ちゃんの足をひっぱちゃうんじゃないかって思ってたの。でも、エースに言われて気がついたの、それでも私はお姉ちゃんと一緒に居たいんだって」

「うん、うん」

簪の言葉を楯無さんは泣きながら、聞いている

「だから私、お姉ちゃんと仲直りしたい」

「うん、もちろんよ。簪ちゃん」

やっぱり兄弟や姉妹はこうじゃないとな、僕も何度も喧嘩をしたけど、

最後はやっぱり仲直りしないと

「それでね、お姉ちゃん。お願いがあるんだけど」

「何？簪ちゃん」

「私の専用機を作るのを手伝ってほしいの」

「うん、それじゃあ、明日から早速始めましょう」

「うん！」

ふふ、凄い満面の笑みだな、

「あの、エースくん？」

「あ、はい、なんですか？」

唐突に楯無さんに声をかけられた

「あ、あの、さっきは怒ったりしてゴメンね。あなたのおかげでちゃんと仲直りできたわ、」

「・・・ありがとう」

そういったの楯無さんの顔はほんのり赤かった

「ええ、どう致しまして。」

僕も微笑んでかえす

「ところで、二人ともお昼食べてないですよね？」

「あ、そういえば」

「・・・わたしも」

まあ、僕が話してたから僕の責任か
まあ、こんなこともあるうかと

「僕、お弁当作ってきたんで皆で食べましょう」

「ありがたくいただくわ」

「・・・わたしも」

「はい、それじゃあ、食べましょうか」

僕はテーブルの上にお弁当を並べる、

ちなみに料理はマザーが帰ってこないときは皆で交代で作ってたから人並みには出来るはず。

ああ、ナインとケイトの料理は凄かったなあ、真っ黒のダークマターが出て来るんだもん

あんなのベヒーモスも食べないよ

「それじゃあ」

「」「」いただきます」「」

「んっ!?!」

「・・・!?!」

料理を食べた瞬間、二人の表情が妙に暗くなった

「もしかしておいしくなかった?」

「いえ、そうじゃないの。(うう、女として負けた気分)」

「・・・うん、とってもおいしい。(・・・負けた、料理の練習もしないと・・・)」

「なら良かった」

僕は満面の笑みを返す

(はっっ! その笑顔と微笑みは反則よ!)

(・・・やっぱりエースは格好いい)

その後二十分くらいで食べ終え、それぞれの教室に戻った。
ずっと二人の顔が赤かったけど、もしかしてフラグ立てた!?
これは一夏の役目のはずなのに

姉妹（後書き）

はい、シャルの次は更織姉妹にフラグを立てたエース君です
次はラウラかな？

次回『狂気の心』お楽しみにー

狂気のココロ（前書き）

最近学校行くのも嫌になってきた・・・
鬱かな・・・

狂気の「コロ

「「あ」「

放課後のアリーナで、場所は第三アリーナ。
声を出したのは鈴とセシリアだった

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしもまったく同じですわ」

二人の間に見えない火花が散る、どうやら二人とも狙っているのは優勝らしい。

「ちょうどいい機会だし、この前の実習のことも含めてどっちが上かはつきりさせとくのも悪くないわね」

「あら、珍しく意見が一致しましたわね」

二人ともメインウエポンを呼び出すと、それを構えて対峙した

「では……」

……と、いきなり声を遮って超音速の砲弾が飛来する

「「!?!?」「

緊急回避後、飛来した場所をみる。

そこには漆黒の機体がたたずんでいた。

機体名 シュバルツェア・レーゲン、搭乗者・・・

「ラウラ・ボーデヴィツヒ・・・」

そう呟いたセシリアの表情がこわばる

「・・・どういづつもり？いきなりぶつ放すなんていい度胸してるじゃない」

そついいながら、鈴は衝撃砲を準戦闘状態に移行させる

「ふん、ISの初心者相手に二人がかりで負ける程度の奴が同じ第三世代の専用機持ちとはな、お前らの国はよっぽど人材不足と見えるな」

ぶちっ！

何かが切れる音がして、二人の武装が戦闘準備状態に移行する

「ああ、わかった。スクラップがお望みなだね。セシリア、どっちが先にやるかジャンケンしよ」

「時間が惜しい、二人同時でいい。下らん種馬を取り合うようなメスにこの私が負けるものか」

「あんた今なんて言った？私にはどうぞ好きなだけ殴ってくださいって聞こえたんだけど」

「この場に居ない人間まで侮辱するなんて、その軽口、叩きなおし

てさしあげますわ」

明らかに挑発なのだが、キレた二人にはそんなことには気付かない

「さつさと来い、雑魚ども」

.....

「楯無さん、そっちどうですか？」

「ええ、これで多分大丈夫よ」

僕たちは、今、簪の『打鉄式』の製作を手伝っていた・・・

「・・・凄い・・・もうほとんど出来た・・・」

「まあ、基本的なことは簪がやってたからな」

実際の所、稼動データとマルチロックオンシステム以外はほとんど完成の状態だった

「・・・でも・・・重要なところはやってもらった」

「まあ、フレア作るときのお礼だよ。それに友達の頼みだからな」

簪のアドバイスもあって、無事にフレアが完成した。

このフレアは広域殲滅から狙撃にまで使える優れものだ

「私も妹の頼みなら何でもするわよ」

「……ありがとう」

ドオンッ！

「なんだ！？」

「ちょっと待って……第三アリーナで問題発生ね」

第三アリーナって一夏達が居る場所じゃ……

「すみません！ちょっと行って来ます！」

「あッ……行っちゃった、簪ちゃん、私も行ってくるわね」

「……私もいく！」

「分かったわ、でも気をつけてね。じゃあ、行くわよ」

「……うん」

そして二人はエースを追いかけた

……

「何だよ、これ……」

アリーナに着くと、そこにはボロボロのセシリアと鈴、そしてそれを殴り続けるラウラの姿……

「おい！止めるー！ラウラ！」

そして、一夏とシャルルの姿が見える

一夏は必死でラウラを止めようとしている

「エースくん！なにがあつたの？」

「！？・・・ひどい！」

「・・・すみません、楯無さん、止めないでください」

「ちよつと！エースくん！」

楯無さんの制止を振り切り、僕は下へ降りていく

「おい、一夏！いくぞ！」

「！？エース？・・・分かつた」

そういつと、一夏は白式を、僕は零式を展開する

「僕がラウラの相手をするから、その間に鈴達を頼む！」

「わかつた、けど無茶するなよ」

「分かつてるぞ」

そうして僕はラウラにフレアで攻撃する、そしてそれを避けようと、後ろに下がるが

そこに近づき、セシリアたちが繋がれているワイヤーブレードを断ち切る

そしてそこに一夏が来て、セシリアたちを連れて行く

「つつ！小癩な真似を」

「さあ、此処からが本番だ！」

僕はフレアを撃ち、後退した所をクローで斬りつけようと、瞬時加速を使う

「ふん、甘いな」

「くツ！動けない」

「危ない！エース！」

僕が動けない隙に、右肩の大型レールカノンの照準を合わせるしかし、そこに駆けつけたシャルルの射撃がラウラに当たる

「ちツ！アンティーク旧型風情が！」

そういうと、ラウラはシャルルを蹴り飛ばし、プラズマ手刀を展開し僕に斬りかかってくる、

ガキンツ！

プラズマ手刀を防ごうとクローで受け止めようとしたら、そこには・
・

「やれやれ、これだから子供のお守りは……」

織斑先生が打鉄の日本刀型ブレードでプラズマ手刀を受け止めていた

「模擬戦をするのは構わないがシールドを壊されては黙認しかねん、決着は学年別トーナメントでつけてもらおう、わかったな」

「わかりました」

「教官がそうおっしゃるのなら」

僕は零式を解除する

「では、学年別トーナメントまで私闘は禁止する、解散！」

そして僕はセシリアと鈴の様子を見に保健室に向かう

.....

「なにも無くてほんとに良かったな」

「別に助けなくても良かったのに・・・」

「あのまま続けてれば勝ててましたわ」

「IS強制解除されてたよね？」

「.....」

「まあまあ、あんまり虐めちゃだめよ、エースくん」

僕についてくると、簪と一緒に来た楯無さんが言う

「そうだよ、二人ともけが人なんだから」

どどどどどどど

「ん？なんだ？」

「地震か？」

ドゴツ！ ドーンツ！

今のはドアが吹っ飛び、吹っ飛んだドアが一夏に直撃した音だ。
一夏は床に延びている

「織斑くん！」

「デュノアくん！」

「エースくん！」

「なに？」

「「「これ！」「」」

「ん？なになに、学年別スリーマンセルマツチ？」

「あれ？織斑くんは？」

「デュノアくん、私とくんで！」

「エースくんは私と」

うーん、スリーマンセルだから三人だよな・・・

一夏は延びてるし、楯無さんは二年だからな・・・

「ごめん！僕、シャルルと簪とで組んでるから！」

一夏はセシリアと鈴の迅速な行動でアンダー・ザ・ベッドだ

「くッ！さきこされた！」

「エースくんとデュノアくんとタッグだなんて羨ましい」

「ねえ、織斑くんは？」

「ああ、さつき消えたよ。ただ、一夏は篠ノ之さんと組むって、もう一人は分からないけど」

「皆！至急織斑くんを探すのよ！抜け駆けはなしだからね」

そういうと、皆廊下に駆けていった

「もういいぞ、一夏」

「おい！エース！なんで俺だけ仲間はずれなんだよ？」

「シャルルは事情があるし、簪は打鉄式式のテストも含めてだから、いざと言うときのためにね」

「くッ！まあ、簪に頼んでみるよ」

「ちょっと一夏！」

「二人の機体はダメージレベルがCを超えてるから出られないよ」

「くッ！」

一夏にタッグを申し込もうとした鈴たちを止める。

そして、僕達は廊下に出た

「・・・ありがとう、エース」

「気にするなよ、まあ、打鉄式式になにがあるかわからないからな」

「うん、でも、うれしい」

「そうか、それなら良かった」

僕はにっこりと笑う

すると簷は顔を真っ赤にした

「・・・ここだから」

「ああ、じゃあ明日な」

「・・・うん」

.....

夜の部屋

「夏は今はシャワーを浴びてる」

「そういえば、ありがとねエース」

「なにがだ？」

「保健室のとき、助けてくれたでしょ？」

「いや、たいした事じゃないよ」

「でも、ぼく凄く嬉しかったよ」

「ならよかった、じゃあ一夏がそろそろあがるし、寝るか？」

「うん、そうしようか」

まったく凄く疲れた、まあ、こんなのを楽しんでる僕が居るのも事実か……

狂気のココロ（後書き）

精神的に來てますが、次話はなるべく早くします

覇者 vs 黒き雨（前書き）

設定でエースの名前、武装の設定などを変えました

零式の三週目をやっていたら、クラサメがアレシアの事を

アレシア・アルラシアと言っていたのでアレシアの子供的な存在だし

エース・アルラシアで良いかなと思って入れました

覇者 VS 黒き雨

時は過ぎ、いよいよ学年別トーナメント当日
僕とシャルルと一夏はアリーナの更衣室に居た

「しかし、すごいなこりゃ・・・」

更衣室のモニターから観客席の様子を見る。

そこには各国政府関係者、研究所員、企業エージェント、etc
数多くの人が集まっていた

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認とかでいろんな
人が来てるらしいぞ、
まあ僕たちは今の所あんまり関係ないけど、上位入賞者とかはチエ
ックが入るだろうな」

「ふーん、ご苦労なことだ」

「一夏はあんまり興味が無いみたいだな、ただ僕たちにはもうチエッ
クが入ってるかもな」

「一夏はボーデヴィツヒさんとの対戦だけが気になるみたいだね」

「まあ、な」

「でも僕らが先に当たったら本気で行くぞ？」

「おう、こっちも本気だ！」

そういつて僕と一夏は拳をぶつけ合う、そしてシャルルは微笑まし
そうにそれを見ている

「さて、そろそろ対戦表が出る時間じゃないか？」

「僕たちはAブロックの第一回戦の一組目なんだよね。くじ運が良
いのか悪いのか・・・」

「良いじゃんか、待ち時間にいろいろ考えなくて済むだろ？思い切
って行けば良いさ」

「ふふ、そうかもね。ボクだったら一番最初に手の内を晒すことにな
るから、

ちよつと考えがマイナスに入ってたかも」

まあ、一夏とは考え方が正反対だろうからな

僕たちのチームワークは上々だ、零式が前方に出て、シャルルが自
由に動き、

簪がマルチロツクオンミサイルの山嵐でサポート、これで殆どのチ
ームは倒せるはずだ

「あ、対戦相手が決まったみたい」

モニターにトーナメント表が表示される

「「え？」」

「すまないな一夏」

出てきた文字を一夏とシャルルは唖然としながら見ている。

僕は想定内のことなので一夏に謝罪

一回戦 第一試合

ラウラ・ボーデヴィツヒチーム VS エース・アルロシアチーム

.....

「ふん貴様が、まあ、準備運動くらいにはなるだろう」

「そうか、それは残念だね。君は準備運動で終わるんだからな！」

試合開始まであと五秒、四、三、二、一、零！

「叩きのめす！」

試合開始と同時に瞬時加速を使う

「おおおッ！」

「ふん……」

ラウラが右手を突き出す、来る

ラウラのISの第三世代装備はAICだ。

慣性停止能力、簡単に言えば見えない網をだし、それに捕まった者は動けなくなるってことだ

だったら対策は簡単

・・・捕らえられなければ良い

僕は危険な瞬時加速時の方向転換を使う、普通の人なら全身の骨が砕けるが

あいにく、僕は普通じゃない

僕はラウラの横に移動すると、クローで斬りつける、そして吹っ飛ばした所で
すかさずフレアをコール、打ち出す。

「ぐツ、ああッ！」

「ちょっと大丈夫！？エース！？」

「ああ、問題ないさ」

「・・・あんまり無茶しないで」

プライベートチャンネルでシャルルと簪が話しかけてくる

「僕は大丈夫だけどそっちは？」

「ボクはもうすぐ終わるよ」

「・・・こっちはもう少し時間が掛かる」

「了解だ、シャルルは終了後、簪の方に」

『了解!』

そこまで言って僕は通信を切る

「さあ、まだまだだ」

残念だが幾ら普通じゃないって言ってもそう何回も瞬時加速中に方向転換すると

今度は臓器の方がやられるからな、もうさっきのは使えないだろうな

「くツ! 貴様! 何者だ!」

「転校してきた時に自己紹介したよね、エース・アルラシアだ。それ以外の何者でもない」

「普通の人間がさっきのような行動が出来るわけがない!」

「悪いな、普通じゃないんだ」

そういうと、僕はフレアの銃身を展開、エネルギーの充填を開始する
そして右手のクローだけで斬りかかる

「くそッ!」

ラウラは両手にプラズマ手刀を展開、ガードしようとする

・・・しかし

パキンッ！

「なッ！？」

受け止めたラウラのプラズマ手刀が粉々に砕け散った。

まあ、当然と言えばそうだが、グランドスラッシュは僕らの世界の最高硬度を誇る特殊金属

オリハルコンで作られている、ダイヤモンドの剣を持ってこようと、この爪には勝てない

「くそオ！」

もう冷静じゃいられないラウラ、集中できなければAICも使えないだろうに

キュインッ！

フレアからチャージ完了の音が聞こえる

フレアの今の所の最大威力「メガフレア」が完成した

本当は更にこの上にギガフレア、テラフレアと上があるのだが、本当にアリーナ所かこのIS学園が地図上から消えかねないのでリミッターが掛かっている

「もう終わりだよ、ラウラ」

僕はフレアの銃口をゆっくり、ラウラへと向ける……

「う、うう」

「メガフレア……」

そう呟くと銃身が金色に輝き、次の瞬間、アリーナが煙に包まれた

・・・そして煙が晴れると、そこには体中から紫電を出すラウラの
ISとラウラがいた・・・

覇者 vs 黒き雨（後書き）

ちよつと中途半端なところで終わりましたね。
今年はあと一回くらいの更新かな？

次回『燃える覇者』

燃える覇者（前書き）

きつとこれが今年最後の作品になりますね。

24日からは出かけるので更新が出来ないので・・・

燃える覇者

(こんな・・・こんなところで負けるのか、私は・・・！)

真つ暗な闇に包まれた空間でラウラ・ボーデヴィツヒは言った

(私は負けられない！負けるわけにはいかない・・・！)

兵器と創られ、一度は堕ちた自分を再び頂点へと導いてくれた教官、その教官の顔に泥を塗った織斑一夏を叩き潰す前に、こんな所で負けられない！
そのためにもまずはあの男を壊すためには・・・

(力が欲しい)

ドクン・・・と何かが私の中で蠢く
そしてそいつは言った・・・

『・・・願うか・・・？汝、自らの変革を望むか・・・？何よりも強い力を・・・望むか・・・？』

当然だ！それが私の存在意義！力こそが全てだ、それを得るためなら全てをくれてやる！

だから、力を・・・比類無き最強を、唯一無二の絶対を・・・私によこせ！

Damage Level・・・D

Mind Condition・・・Uplift

C e r t i f i c a t i o n . . . C l e a r

【V a l l k y r i e T r a c e S y s t e m】 . . . b o o t

.

「うあああああつ!!」

「 . . . な、なに! ?」

メガフレアを受け、戦闘不能に陥ったラウラのシュバルツエア・レ
ーゲンを

黒い、ドロドロした液体が包み込んでいった、そして黒い塊の手に
握られているのは

「 . . . 雪片か . . . 」

おそらく、本でもみたVTシステムか . . .
アレは開発、研究も禁止されてるんだけどな . . .

『おいつ! エース、そいつは俺がやる! 俺がやるんだ! . . . おい
! 離せよ!』

一夏が突然個人通信で話しかけてくる、が、ずいぶん暴れてるな . . .

『一夏! 悪いが、僕がやらせてもらおうよ。』

『 . . . わかった、でも絶対負けんなよ!』

『当然だ、朱に失敗の二文字は無いよ』

ふう、まったく、シスコンも此処まで来ると手がつけられないな。

「・・・シャルル、簪、相手の二人を連れてっくれ」

「エースはどうするの?」

「僕はコイツを倒さないとな」

「・・・だめ!・・・エースも一緒に」

「僕を信じて!絶対に負けないさ」

「・・・じゃあ、約束して」

「怪我しないでボクたちの所に戻ってくるって」

簪とシャルル、二人とも・・・

「ありがとう!その約束守るよ」

僕はさっきのメガフレアで銃身が壊れたフレアを捨てる

・・・これも作り直さないとな・・・

「零式、朱雀発動!」

そういつと、零式が炎に包まれるように赤く染まる

「一瞬だ、瞬きするなよ」

僕はクローに魔力を流し込む、するとクローが光輝く、僕はそれを構える

そして黒いISは雪片を居合いの構えで構える・・・

「・・・行くぞ！」

僕は瞬時加速で接近する、黒いISも同様に近づいてくる

「忘れたかい、僕は普通じゃない」

そう、普通じゃない。

僕は瞬時加速時に横にロールし、居合いを避ける、そして再び瞬時加速で折り返し

クローで切り上げる

・・・肋骨が何本か逝ったかな、シャルルに怒られるな・・・

そして黒いISの中から出てきたラウラを抱きとめる

その時の顔は助けを求めるような、ちゃんとした少女の顔だった・・・

・・・

ラウラサイド

精神世界

(なぜ貴様はそんなに強いのだ?)

今、私の前にはあの男が居る

(僕はまだ弱いよ、まだ修行中だからね)

(なぜ、強くなろうと思うのだ?)

(大切な人を守るためかな? ラウラは何のために力が欲しい?)

(・・・分からない・・・力が全てだと・・・そう言われてきた・・・)

(そう、か。じゃあ、これから知ればいい、いろんな人を見て、自分の考えを見つuckerんだ)

(私に出来るだろうか?)

(大丈夫さ、僕も手伝っし、君が本当にそう望むならきっとできるよ)

ああ、なんて暖かいのだろう・・・

.....

保健室

「はっ! 私は・・・」

「目が覚めたか」

教官が私の隣に居た

「教官……ここは？」

「保健室だ、エースに感謝しろよ、アイツが居なければどうなっていたか。」

ちなみにお前の機体のコアは生きていた、予備パーツくらいはあるだろうから好きにしろ」

「はい……」

「……ラウラ・ボーデヴィツヒ、お前は誰だ」

夕日を浴びた教官が聞く

「私は……」

私は……だれなのだ？

「ならば今日からお前はラウラ・ボーデヴィツヒだ、お前はお前、他の人物にはなれない。」

何をしたい、どうしたいかはお前自身が決めることだ。

時間はあるのだからゆっくり考えるといい」

何をしたい……か……

燃える覇者（後書き）

・・・とりあえず、全部のフラグは立ちましたね。
これからどうするかが問題ですが・・・

学年別トーナメント その後(前書き)

凄く書きたくなったので、早く仕上げちゃいました。
でも今回ちょっと強引にやりすぎた・・・

学年別トーナメント その後

「もうっ！怪我しないって約束したのに」

僕は今、食堂でシャルルと饗、そしていつの間にか来た楯無さんに怒られている

「……ホントに心配した」

「そうよ、ホントに心臓に悪いわ」

「本当に、すみません」

まあ、こういうときに謝るのは当然だろ、僕が心配かけちゃったのは事実だし

「まったく、もう良いけど」

「……うん、取りあえずは」

「肋骨以外には怪我也無いしね」

うん、それは幸運だったな、あれは下手したら内臓が潰れてしまうから

「」「でも！」「」

「バツゲームは必要よね」

「ですよね」

「……うん」

あれ？許してくれたんじゃないの？

「どうする？」

「……迷う」

「……ただ言うことを聞いてもどうって言うのはどうですか？」

「それいいわね」

「……うん」

なっ！？やばい、非常にヤバイ、簪は大丈夫だろうけど楯無さんは危険だ、比較すると小石と核弾頭くらいに……

「拒否権は？」

「……有ると思う？」

くそっ！分かってたよ！

「ボクは今は特に無いから保留で」

シャルルはまだ無いらしく、保留

「私は・・・そうねえ・・・」

きた、ジョーカーだ

「キスでもして貰おうかしら」

きたっ！核弾頭

「拒否権は無いわよ」

僕は簪とシャルルに助けると視線を送る

「「・・・」

無言、酷いよ！信じてたのに

二人の内心

『ボクも今度・・・』

『・・・私も頼んでみようかな・・・』

哀れエース、味方だと思った人たちはグルだった

「じゃあ、やって貰おうかしら」

「うっ、やらないと駄目ですか？」

「もちろん」

くそう、ファーストキスなのに
・・・いや、まあ嫌では無いけどさ

「それじゃ、お願い」

そういつて目を瞑る楯無さん

「わ、分かりました」

僕は徐々に近づく

・・・そして

「ん」「ん」

二人の唇が重なった

「ふふ、ありがとね、エース」

さりげなく呼び捨てにする楯無さん

「はあ、簪は？」

きつと、大丈夫だろ

「・・・私も」

・・・はい？わたしも？つまりシャルルと同じ保留だよな、きつと
そうだ！

「・・・私もキス・・・して？」

・・・この世界に神は居ない

「・・・駄目？」

・・・くそ、こんな涙目上目づかいなんて卑怯だ

「・・・分かったよ」

僕は簪を抱き寄せてキスをする

「・・・エースって意外に強引」

ほほを赤くさせながら言っ来て来る簪

「何で僕にキスなんてさせたんだ？」

僕は二人に聞く

「だってエースが好きだし」

「・・・（コクコク）」

やっぱりですか、でも随分大胆だな。てか好きな人が他の人とキスするって普通嫌がるでしょうに

「・・・すいません、ちょっと考える時間をください」

「」「うん」

僕は食堂を後にした、全く人が居なくて助かったよ

.....

実は、少し前の保健室

楯無、簀、シャルルの三人は保健室に居た

理由は、一応怪我が無いか調べる、と言うものだった

「ねえ、二人とも」

保健室にいと、楯無が二人に話しかける

「なんですか？」

「・・・なに？」

「二人ともエース君のことが好きでしょ？」

突然の楯無の言葉に二人は顔を赤くする

「な、何を突然言うんですか？」

「・・・そうだよ、それにシャルル君は男でしょ？」

「いいえ、シャルル君は女よ。あ、でも安心して、誰にも言っていないから」

「な、何で知ってるんですか？」

さつきとはま逆に顔を真っ青にするシャルル

「まあ、生徒会長として、少し調べたの。でもエース君のお蔭で解決したんでしょ？」

「ええ、まあ」

「ってことで、エース君のことどう思うっ？」

「えっと、す、好き、です……」

「……わ、私も」

「私もだ」

次々に応える、シャルル、簪、ラウラ

「うんうん、ってあれ？ラウラちゃん!？」

「ベッドで寝ていたら興味深い会話が聞こえてきたのでな、混ぜてもらおうとな」

「えっと、ラウラちゃんもエース君が好き？」

「う、うむ。なぜかアイツのことを考えると顔が熱くなって、落ちて着かんのだ、

それで部下のクラリッサに聞いたらそれは恋だと言われてな」

ラウラは珍しく顔を赤くして応える、その顔はドイツの冷氷の面影は無く、十代女子の表情だった

「じゃあ、ちょうどいいわね。エース君のことだけど・・・」

「ゴクリ」「」

「きっと彼は私達の事は嫌いじゃないけど、一人には絞れないと思うの」

「た、確かに」「」

エースは基本、誰かを傷つけるのを嫌う、
よって、自分が誰か一人と付き合おうと他の人たちが傷つくものと考えているだろうと楯無は考えた

「だから、ゴニョゴニョでゴニョゴニョしましょう」

「いい、良いんですか？」「」

「皆が良いのならね」

「ボクは良いかな？誰かが傷つくのも嫌だし」

「・・・私も」

「私もだ」

「じゃあ、決定で良いわね」

「はい」

「・・・ん」

「むむ」

こんな会話があったことをエースは知らない・・・

学年別トーナメント その後（後書き）

やっぱり無理やり過ぎましたよね。

普通じゃまず有り得ませんし・・・

恐らく今度こそ今年最後の更新です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5564y/>

インフィニットストラトス零式

2011年12月24日01時59分発行